

かわさき区の宝物シート

宝物No.	23-3
しもしんでん 下新田	

エリア	田島地区 小田・浅田	シーズン 通年 日時
-----	---------------	------------------

目的	<input checked="" type="checkbox"/> 観る <input type="checkbox"/> 食べる	<input type="checkbox"/> 遊ぶ・体験する <input type="checkbox"/> その他
宝物定義	<input type="checkbox"/> ものづくり <input type="checkbox"/> 味づくり <input type="checkbox"/> 現代の文化的なもの <input checked="" type="checkbox"/> 歴史的なもの	<input type="checkbox"/> イベント・祭り <input type="checkbox"/> にぎわい <input type="checkbox"/> 港めぐり <input type="checkbox"/> 人物



現在の「夜店通り」と下新田バス停



写真提供：蛭間寛氏

所在地	川崎区浅田3~4丁目
問い合わせ	
TEL	
FAX	
E-mail	
URL	
交通	JR川崎駅よりバス「下新田」下車



基礎情報

■小泉次大夫による二ヶ領用水開削工事が完了し、川崎領の隅々まで農業用水が行き渡るようになったのは江戸初期の慶長16年(1611)のこと。これを受け、潮田村(現・鶴見区)の人々の手によって、元和4年(1618)に江戸湾沿いの原野であった土地に新田が開墾された。現在の浅田3~4丁目にあたり、潮田村の下に位置することから下新田と名付けられ、以降田畠の整備が進められた。川崎区域では江戸時代で最初に海浜部に開発された新田である。

■開墾当時は海岸に沿った土地で、はじめは砂や赤土混じりの地味の悪い場所であったが、農民達の努力によって土地改良が重ねられたという。大正時代末で30戸ほどの半農半漁の集落であったが、関東大震災後の復興期において産業道路の整備や埋立地への企業・工場の進出によって人口が急増し、特に潮田地区は繁華街として活況を呈したことから、同じ経済・文化圏であった下新田地区にも東西に伸びる商店街ができ、通称“夜店通り”として大いににぎわった。毎月3のつく日はかるめ焼や金魚すくい、バナナの叩き売り、古本・古道具、植木・鉢植、七味唐辛子やガマの油の口上など多くの夜店が軒を連ねた。

由来・エピソード

■かつて大師河原から潮田に至る海岸沿いには延々と松並木が続き、松の根に守られた高さ2mほどの堤防がつくなっていた。明治末から大正にかけて海岸一帯の開発事業が促進され、堤防の外側の遠浅の海は埋め立てられていった。大正14年(1925)には京浜電鉄の関連会社として海岸電気軌道が発足し、堤防は整地され電車路が敷かれ、下新田付近には「下新田」「浅間前」「富士電機前」「田辺新田」等の停車場が開業した(昭和12年(1937)11月廃線)。なおこの電車路こそが現在の産業道路の原型となつたのである。

■昭和20年(1945)、川崎大空襲で一面が焼野原となった後に下新田地区は進駐軍により接收された。鉄条網で囲まれた石油基地(ドラム缶置場)として一帯の土地がかさ上げされ整地されたことから、かつての名残をとどめるものは無くなってしまったという。地盤高は川崎区で一番高いといいう。昭和23年(1948)に接收は解除され二軒長屋の市営住宅が建てられ、昭和40年代には地域の住宅開発が広まり、個人の一般住宅地として姿をかえ現在に至る。今では川崎鶴見臨港バスの停留所に「下新田」の名をとどめるのみである。

■かつて下新田には菩提寺として善性寺、村社として豊受姫命を祭神とする福吉稻荷があった。福吉稻荷は「明治十六年神社明細帳」には166戸の氏子がいたとの記録が残り、明治42年(1909)には日枝大神社に合祀されている。昭和初期、稻荷講の縁日には工場の従業員とその家族などにぎわったといわれる。戦災によって稻荷講で開帳される掛け軸が消失したが、戦後日枝大神社宮司の書によって「福吉稻荷大明神」の掛け軸が復元された。稻荷講も復活したが、参加者の高齢化により現在は中止されている。

補足・その他

--

関連シート

- (22-2) 鶴見線
- (23-4) 田辺新田